

社会科学の再建をめざして

小室ゼミナール

小室ゼミは他の研究会とはことなつて、小室直樹氏を講師とする自主的なゼミナールという形をとっている。小室直樹氏は、既に御存知の方も多いと思うが、日本の社会科学界においてきわめてユニークな存在として内外の注目を集めてきた人物である。彼の学問的遍歴については、近著「危機の構造」(ダイヤモンド社刊、1976)に詳しいので省略するが、それらの学問的遍歴ののちに彼が到達した結論は、社会科学は崩壊寸前であるか、または既に崩壊してしまつたという「認識」であり、新たな方法論によつて社会科学の再建をおこなわなければならないという「決意」であつた。彼の説によれば、政治学なるものはもともと存在しないも同然であり、経済学と社会学は近年の様々なパラダイム批判の続出からうかがわれようように、その生命は風前の灯である。われわれ社会学者はうかうかしてはいられない。早くしないと社会学はなくなつてしまう。なくならないうちにわれわれの手で再建しなければならないというのである。

現在の小室ゼミは、このように「社会学の再建」ひいては「社会科学の再建」という使命を背負つた極めて気宇壮大なものであるが、小室ゼミの形成過程に着目すると必ずしもスケールの大きなものであつたとはいえない。小室ゼミの前身は、小室直樹氏が政治学研究科在学中に田無寮において主催してゐた“Tanashi School of Economics”であつた。この自主ゼミは理論経済学を中心として、その理解のために必要な数学的知識をも身につけようとするものであつて、当時の受講者に法社会学者で「紛争と法」の著者である広瀬和子氏、経済社会学者の原山保氏、教育社会学者の中山慶子氏らがあつた。当時はメンバーに女性が多く、またの名を“Tanashi Women's School of Economics”といわれたという。

田無寮で内容的には極めて活発に、しかし外見上は細々とおこなわれていた自主ゼミは、昭和47年に至つて本拠地を当社会学研究室に移すに及んで、社会学研究科の大学院生を加えることとなり、現在の小室ゼミが出来あがることになる。当時の主要メンバーは、厚東洋輔氏(大阪大学専任講師)、安藤文四郎氏(千葉大学助手)、高田昭彦氏(成蹊大学専任講師)、今田高俊氏(東京大学助手)、盛山和夫氏(米留学中)らであつたが、現在はほぼ世代交代が完了し以下の諸氏が社会学研究科所属のメンバーとしては在籍していることになる。(ただし白倉幸男氏は修論執筆の都合上この研究会報告には参加してゐないもののメンバーの一員である。また社会学の学部学生、教育社会学の大学院生も参加している。)

本年度の小室ゼミは「社会科学の再建」を大目標として掲げ、それに至る道程として経済学を中心とした講義と演習がおこなわれた。そして経済学に必要な数学的

知識。および統計学については、サブゼミとして橋爪大三郎氏を講師とする別ワクの自主ゼミを開いた。両方のゼミを合わせて週10時間というハードスケジュールであったがみなよく頑張ったと思う。しかしながら、掲げた目標の大きさに比べてみれば、この一年間で身につけたものはそれほど多くない。まだまだ社会科学再建への道は遠いようである。

以下は、不十分ながらも、この一年間小室ゼミに参加した四名がそれぞれの問題意識に即して考えたこと、研究したことをコラム程度にまとめたものである。

経済学と社会学と経済社会学

筆者が小室ゼミに参加したのは、筆者が経済社会学を専攻しようとしたからに他ならなかった。卒論で消費行動についてとりあげ、その社会学的分析について若干考えることにより、経済社会学なるものを自己流にイメージし、それに対して興味を抱いたので、私は大学院では初めから経済社会学を専攻するつもりでいたのである。そうしたところが大学院ではかの有名な小室直樹氏が数学と経済学を教えているというので早速参加したわけである。(昭和49年の春であった。)

参加してみると、初めのうちは数学ばかりで閉口したが、夏頃は理論経済学になり、かなり興味をもつて勉強することが出来た。小室直樹氏は基本的にはミクロ的色彩の強い人なので、経済学の内容もミクロが多かったが、あれだけの内容を曲がりなりに理解できたのは小室先生の優れた指導のおかげだと思っている。

さて、経済学と社会学と経済社会学とは微妙な関係にあり、その関係を短い言葉で述べることはなかなか容易でない。私は修士論文のまえがきで三者の関係を整理してみたのだが、現在読み返してみるとあまり納得のいくものにはなっていない。現在思っていることは、そんな大それた問題を考えるよりは、自分の当面できる仕事を徐々にかたづけつければ、10年後ぐらいには自然に答えがでるだろう、ということである。しかしそういつてしまつては身もふたもない。10年といわず1年、1ヶ月でも、経済学や社会学についての理解が深まれば、この三つの学問の各々についての認識が深まるだろう。そのたびごとにまとめてみればいいのだ。そういう意味で、この文章は10年ものの利付債の1年目の利息のようなものである。

さて本題に入らなければならぬ。現在私の考えるところでは、経済社会学というものは、経済現象を社会学的に研究するものである。したがって経済社会学は社会学の一種であつて、経済学の一種でもある。発想が社会学的であつて領域が経済学的なのである。……しかしこれでは何もいったことにはならない、そんなことはいわれなくてもわかつている、と人はいうだろう。けれども、これだけでも案外内容はあるのだ。発想が社会学的で領域が経済学的という学問に対して、発想が経済学的で領域が社会学的という学問もあるのだ。私の経済社会学についてのとらえ方は後者を排除するものなのである。そして私の主要関心はそういう意味での経済社会学の方にある。……ところが残念にして惜しまらしくは、小室先生の主要関心は発想が経済学的で領域が社会学的な学問にあるようなのだ。その意味では、最近若干小室ゼミとの距離を感じつつあるというのが偽らざる心境である。

とはいうものの、前者、後者いずれに重点をおくにせよ、研究プロセスにおいて経済学と社会学の両方を学ばなければならないことには変わりなく、経済学についても社会学についても、小室先生に教授さるべきことは多い。

ところで、発想が社会的であるとか、経済学的であるとかいうのはどういうことを意味しているのだろうか？

この問題に対して、ひとことではざりと、たとえば社会学は非合理的行動を含めた行動をもとりあげ、経済学は合理的行動のみをとる、ということができればカッコいいのだが、ことはそれほど簡単ではない。社会学、経済学といっても、それぞれの中に種々雑多な問題意識、領域、アプローチを含んでおり、快刀乱麻、一言のもとに両者の発想の違いをいつてのけるのは困難なのが実状である。両者の比較を推し進めていった末に、何か一言でいつてのけられるような違いが浮かびあがってくるかも知れないが、現在の私にはそれほど力はない。

そこで思いつくままに、社会的発想と経済学的発想の違いをあげてみると、

1. 経済学では、数学モデルの発展とともに、システム論的発想が進歩をとげたが、社会学ではそれがたち遅れ、因果論や素朴な目的論がはばをきかせてきた。
2. 経済学では、ミクロ理論に見られるように、実証に基礎をもたない論理演繹的理論が大きな比重を占めてきたが、社会学ではそれに相当するものが見当たらない。
3. 経済学では、実証研究において用いられる説明変数が限られているが、社会的実証研究ではあらゆる変数を導入しようとする。
4. 経済学では、人間の意思決定プロセスにおける「評価的」側面に重点がおかれてきたが、社会学ではむしろ評価の内容がどのような諸要素から成立しているか、またそれら諸要素がどのような客観的要因に条件づけられているかに重点がおかれてきた。
5. 経済学では、人間行動が単一または少数の目的や動機（たとえば利遣動機）に導かれていると仮定しがちであるが、社会学ではむしろ多目的、多動機を仮定することが多い。

などがあげられる。

私の考えるところでは、この中らの中で経済学的発想に社会学が見習うべきなのは、第1点のみである。そして第2点は全く採るべきでなく、第3点ないし第5点は、実用的なモデルの単純化、という意味においてのみ認められるべきところである。何故なら、第1点は社会学がトータルな社会システムを扱うと称しながら、実際には政治学や経済学以上に狭い問題領域や問題関心しかもてなかったという実状を打開する決め手となるだろうから。第2点は現在経済学が批判にさらされている際の中心点であって、私もその批判に賛同するから。第3点は当然多い方がいいに決まっているから。第4点は分業体制をそのまま続ければよいから。第5点もやはり多い方がより現実によく近くことができるから。

そして私は、3~5の点から、経済現象を社会的発想でとらえたいと思っ
るのである。

(間々田孝夫)